

仏教が成立したインドでは、紀元前三世紀ごろからバラモン教の神^{かみかみ}々が仏教に取り入れられるようになりました。その種類も数も増えていき、梵天^{ほんてん}・帝釈天^{たいしゃくてん}などの「天^{てん}」とよばれる一つのグループを形成するようになります。それらの初めの役割は、仏法^{ぶつぽう}を護^{まも}る神としてでした。

日本でも仏教の伝来以降、さまざまな「天^{てん}」が祀^{まつ}られるようになります。

「天^{てん}」の像の最古のものは、国宝・法隆寺^{ほうりゆうじこんどう}金堂^{しやんとう}の四天王像とされています。これは、中心のお釈迦さまの像を護^{まも}るように四方^{しほう}に立っています。四天王は、仏教世界の東西南北の四方を護^{まも}る神として考えられたのです。それぞれ、東を「持国天^{じこくてん}」、西を「広目天^{こうもくてん}」、南を「增長天^{そうちやうてん}」、北を「多聞天^{たもんてん}」が護っています。

この四天王のうちの、北を護る「多聞天^{たもんてん}」は、後^{のち}に独立した信仰の対象となり、その別名が「毘沙門天^{びしゃもんてん}」です。

この「毘沙門天^{びしゃもんてん}」の信仰は、北方^{ほっぽう}の守護神^{しゆごしん}ということから古くは京都では北にあたる鞍馬寺^{くらまでら}、また東北地方にもいくつかの毘沙門天像が現存しています。上杉謙信^{うえすぎけんしん}が「毘沙門天^{びしゃもんてん}」を信仰していたことや、楠木正成^{くすのきまさしげ}の幼名^{ようみょう}が多聞丸^{たもんまる}といったことからわかるように、戦いの神としても武将の信仰をみつめていました。後には邪悪^{のち じゃあく}なものも払い、福徳^{ふくとく}をもたらす神としての性格があらわれてきます。片手に持つ武器で魔を払い、もう片方の手で持つ宝^{たから}の塔^{とう}から財宝を与えてくれるという信仰が起り、現在では、七福神の一人にもなって多くの人々の信仰を集めています。

さて、この「毘沙門天^{びしゃもんてん}」の像、お腹の部分に鬼の面をつけているものがあります。また、足下^{あしもと}に鬼を踏んでいる像もあります。この鬼は「天邪鬼^{あまのじゃく}」といいます。「わざと人に逆らう言動^{さか げんどう}をする人」をあらわす「天邪鬼^{あまのじゃく}」の語源です。

足で踏みつけているのは、仏教の敵を抑えるということをあらわしています。仏教でいう人間を悩ませる煩惱^{ぼんのう}を抑えているといったものでしょうか。

いさ 勇ましい姿の「毘沙門天^{びしゃもんてん}」に手を合わせ、お願いをすると同時に、自分の中の煩惱に向き合ってみてはいかがでしょうか。